

アール・デコの精神を現代のラグジュアリーへと編み直す芸術家

中野香織／服飾史家、作家

ジャンヌ・ランバンは、1925年パリ万博の「パヴィヨン・ド・エレガンス(エレガンス館)」において、モードを建築・装飾・美術と同格に並べた中心人物である。建築家アルマン＝アルベール・ラトーの設計によるこのパヴィリオンで、ファッションを衣服・宝飾・インテリア空間と響き合う総合芸術として提示した。

ランバンは1920年代初頭からラトーと協業し、本店やサロン、自邸までを「ランバン・デコラシオン」として統一。稀少素材や「ランバン・ブルー」の色使いを通してモードの美学を空間に広げた。1925年～27年に完成したパリ16区のジャンヌ・ランバン自邸の室内装飾の一部は、パリ装飾美術館に移されており、ランバンのアールデコの感性をインテリア空間の中に感じ取ることができる。

モードを超えるランバンの手腕は香水やグラフィックにおいても冴える。なかでも1927年に発表した「アルページュ」である。黒い球体フロンをラトーが設計し、ポール・イリブが「母と

娘」を象徴するイラストを描いた香水は、今に残る名香として愛されている。服・インテリア・香り・視覚表現を貫くイメージ体系を確立したことで、ラグジュアリービジネスにおけるトータル・ブランディングの先駆者ともなったといえる。

服のデザインにおいても、直線的なフラップスタイル全盛の時代に、量感ある「ローブ・ド・スタイル」や、刺繍・光沢素材の装飾性と品格を両立させた独自のスタイルを提示した。これは年齢や体型を問わず女性に幸福感を与え、多くの支持を得た。時代の流行に迎合せず、同時に時代の空気も巧みに取り込むバランスのいい美学を通して、女性の生活文化にアール・デコを浸透させた。

アルページュの「母と娘」のモチーフが語る通り、メゾンの核には生活に根ざした情愛がある。実際、ランバンが高級婦人服へ進出する契機となったのは、娘のマルグリットに作った子供服が注目を浴びたことだった。



PHOTO: TAMEKI OSHIRO

PROFILE: (なかの・かおり) 英国文化を起点にファッション史、ラグジュアリー領域などを研究。『「イノベーター」で読む アパレル全史【増補改訂版】』(日本実業出版社)など著書・監修書は20冊超。東京大学大学院修了後、ケンブリッジ大学客員研究員などを歴任

アール・デコの精神を現代的なラグジュアリーと生活文化に編みなおした革新的な芸術家にして実業家でもあったジャンヌ・ランバンは、虚飾を避け、堅実で自然体のまなざしで女性の日常に幸福や美を届けた、穏やかな現実主義を貫いた女性でもあったのだ。

EVENT

三菱一号館美術館の「アール・デコとモード」展と連動「ランバン」が主催するポップアップ

三菱地所が運営する三菱一号館美術館では、10月11日から来年1月25日まで、「アール・デコとモード 京都服飾文化研究財団(KCI)コレクションを中心に」を開催する。連動して、博覧会で活躍したジャンヌ・ランバンの「ランバン」に焦点を当てた連動ポップアップストアなど3日間限定の特別企画を実施する。丸ビル・マルキューブで10月11日から13日まで、DAIKEI MILLSが企画・空間演出を手掛けたインタラクティブなポップアップスペース「ART DÉCO EXPO petit」(仮題)を設置する。アール・デコを現代的に再解釈し、LGSという構造体に装飾を重ねた前衛的な空間を作る。ここでは「アール・デコとモード」展来場者に配布するフライヤーを限定ステッカーに交換できるほか、「ランバン コレクション」「ランバン スポール」「ランバン オン ブルー」といったファミリーブランドの限定アイテムを集めたポップアップブティックも展開する。

「アール・デコとモード」展サイト <https://mimt.jp/ex/artdeco2025/>

